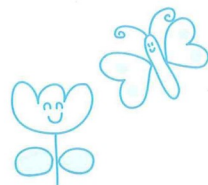


パチンコ依存問題への相談支援 電話相談の現場より

西村直之

にしむら なおゆき
ばちんこ依存相談機関 リカバリーサポート・
ネットワーク代表 (沖縄県中頭郡西原町)



はじめに

リカバリーサポート・ネットワーク (以下、RSN) は、日本で初めてパチンコ・パチスロの遊技に関する依存および依存関連問題解決の支援を行うことを目的に設立された、非営利の相談機関である。

パチンコは、日本で誕生し、山村から都市部まで日本全国で1,000万人以上が広く利用する娯楽である。この身近な「下駄履き」娯楽は、多くの人に利用され、広く社会的に認知されながらも、一方で否定的・負のイメージをもつ人も多い、正・負のイメージを併せもつ特殊な存在でもある。

借金や失業などの経済問題、育児放棄や家庭内暴力などの虐待・暴力問題、依存や抑うつ、自殺などの精神医学的問題などがパチンコの周辺で生じており、社会問題となっている。これらの問題とパチンコとの関連は、現在のところよくわかってはいないが、これらの表面化した問題によって、パチンコという遊技に対し、社会が厳しい目を向けていることは事実である。

以前よりパチンコは金銭問題との関連で取り上げられることが多かったが、パチンコ業界が関連問題に取り組む大きな契機となったのはパチンコ店の駐車場で多発した子どもの車内放置事故であった。この事態を重く受けとめたパチンコのホー

ル (店舗) 関係者の組合である全日本遊技事業協同組合連合会 (以下、全日遊連) は、放置事故の背景にある「過度ののめりこみ (依存)」に目を向け、2003年4月に「依存症研究会 (現:パチンコ依存問題研究会)」を発足させた。この研究会の中で電話相談による早期介入窓口の設置が検討され、2006年4月に第三者機関としてRSNが設立された。

本稿では、RSNに寄せられた相談電話のデータ (2006年4月~2008年3月) から見たパチンコ依存問題の現状について若干の考察を加えて報告する。

2006年度および2007年度の 相談データから

RSNは、①パチンコ依存問題の電話相談、②研修・人材育成、③啓発活動、④調査・研究、⑤ネットワーク作成を主な業務としている。相談電話は、4名の相談員が、平日の午前10時から午後4時まで対応し、相談料は無料 (通話料は相談者負担) である。

1) 相談件数・相談時間

2006年4月の開設以来、1,835件の相談が寄せられた。月平均では、76.5件であった。パチンコホールの協力もあり、2008年4月以降は月100件前

表1 地域別相談件数

	2006年度 (件)	2007年度 (件)	総計 (件)
1位	沖縄 96	大阪 93	沖縄 163
2位	神奈川 65	沖縄 67	大阪 151
3位	東京 62	福岡 51	東京 109
4位	大阪 58	東京 47	神奈川 106
5位	福岡 53	神奈川 41	福岡 104
0件	福井 山梨	鳥取	

後の相談が寄せられている。相談者の通話時間の平均は15.5分であった。1回の相談時間は、全体の70%が20分以内に終了しており、本人からの電話は「やめるためにはどうしたらいいか」と簡潔で短い傾向がある。一方で家族の立場の方では、状況説明や本人への不満など相談時間が長くなる傾向がある。

相談件数のうち、初回相談が79%、複数回の相談が21%であり、初年度に比べて、複数回の相談者が増加している。一度利用された方に「役立つ資源」として認知されてきているようである。

2) 地域別相談件数

47都道府県より相談が寄せられ、相談地域別の総計では沖縄 (163件)、大阪 (151件)、東京 (109件)、神奈川 (106件)、福岡 (104件) の順であった (表1)。大阪は、ホール内に掲示されたポスターを見て電話してきた人が多く、沖縄県は、ポスター経由が1件しかなく、地域特性が認められた。相談件数の数が地域の問題の多さと関連しているわけではなく、メディアで取り上げられた地域やパチンコホール内でのポスターの掲示に積極的な店舗が多い地域からの相談が上位を占めたと考えられる。

3) 相談者の内訳

相談者の内訳としては、本人からが46%、家族・友人からが44%であった。本人比率は、年々高くなっており、2008年度に入ると50%を超えている。本人比率の高さはRSN電話相談の

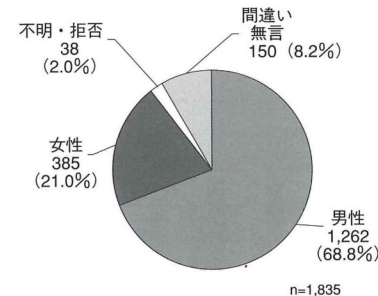


図1 対象者の性別

特徴である。相談者の男女比率では、男性37%、女性56%であった。対象者 (問題をお持ちの方) は、男性69%、女性21%であった (図1)。対象者の男女比は、遊技参加者の男女比と近似している。相談してこられる家族は女性が多く、本人からの相談は男性が多い。

相談者の年代層では、30歳代がもっとも多かった。ついで50歳代、40歳代、20歳代、60歳代の順であった。対象者の年代層でも、30歳代がもっとも多く、40歳代、20歳代、50歳代、60歳代の順であった。相談者、対象者ともに広い年代層に問題が存在しているが、20~30歳代を中心とした比較的若い層と、40~50歳代を中心とする壮年層という2つの層があるのかもしれない (図2)。

4) 相談内容

相談内容では、「やめ (させ) る方法」がもっとも多く、ついで「地域の相談先」「家族の接し方」であった。利用者のほとんどが、依存問題の相談機関であることを認識して相談していた。相談者の55%に借金・債務が確認できたが、返済方法に関する相談は、2%弱に過ぎなかった。借金はないが、給与やボーナスをつぎ込んでしまい、将来への不安を感じながらもやめられないという方も少なくなかった。多くの相談者が借金を

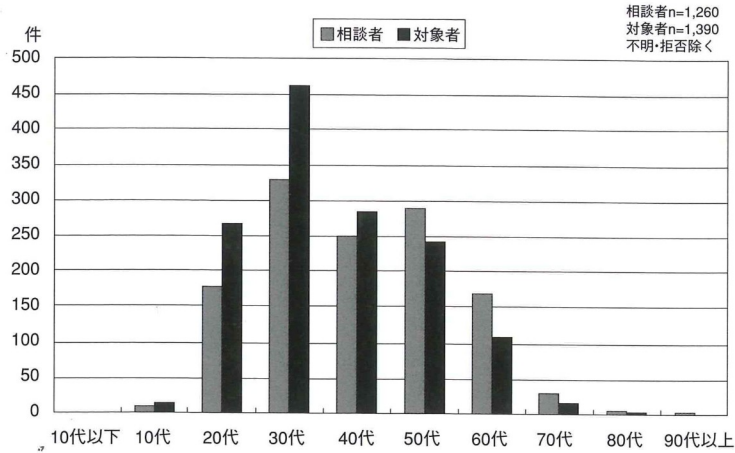


図2 相談者と対象者の年齢

しながら、その返済方法よりもパチンコをやめる方法を知りたい、というニーズがほとんどを占めた。「やめられないので、地元で相談できる場所を教えてください」といった方や「パチンコにのめりこんでいる家族の対応に困り果てた」という方も多かった。

5) パチンコ開始年齢・問題化した時期

のめりこんで困っている本人に対する「パチンコを始めたのは何歳の頃ですか」という質問では、男性の多くが10歳代、20歳代に開始し、女性では20歳代が多いものの、開始年齢は全年代層に及んでいた。早期に開始した男性に問題が生じやすい可能性が考えられ、女性はどの年代から始めても問題が生じやすい可能性が示唆された(図3)。これは、諸外国の他のギャンブラーでも同様の傾向が認められている。

本人からの相談で、いつ頃から問題化したか(楽しめなくなったか)を聞いたところ、男女ともにこの1~2年という回答がもっとも多く(図4)、全体の33%に上った。10年以上長期的に問

題化しているケースも全体の26%を占め、10年以上、問題化しているケースは、男性では30%、女性では19%であった。いったん依存問題が生じると、長期にわたり問題が持続する危険性が示唆された。

6) パチンコ以外のギャンブラー

パチンコ以外のギャンブラーについては、ほとんどの相談者は他のギャンブラーを行っておらず、パチンコに特化していた。この特化性はパチンコの依存メカニズムともかかわる特徴ではないかと考えられる(図5)。

7) 相談経験と相談先

RSNに電話する前に、どこかに相談したことのある人は全体の約4分の1に過ぎなかった。相談先としては医療機関がもっとも多く、次いで精神保健福祉センター、弁護士会であった(図6)。長期に問題を抱えている相談者が多いにもかかわらず、相談経験者が少ないことは、問題の長期化・深刻化につながっている可能性があり、積極的な

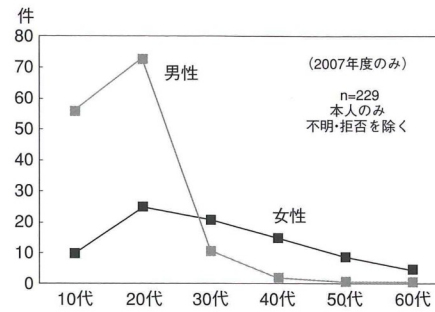


図3 パチンコ開始年齢 (性別比較)

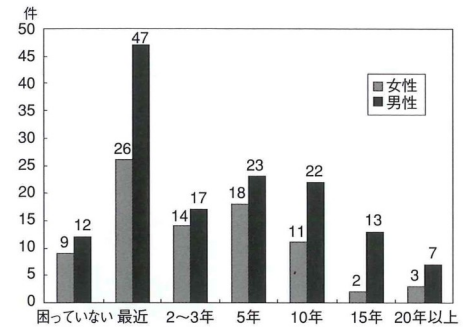


図4 問題化した時期 (性別比較)

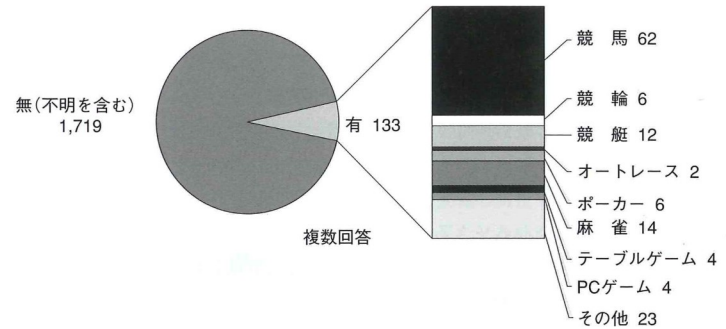


図5 パチンコ以外のギャンブラー

問題啓発と社会資源側にもサービスの提供の必要性を示唆している。

8) 相談者の有する関連問題

相談者の有する関連問題では、20%以上の方になんらかの関連問題が存在していた。関連問題としてもっとも多かったのは、狭義の精神障害(不安障害、軽うつ状態、自律神経失調症など) ※相談者の表現のまま記載)だった。アルコール問題(52件)、DV被害(51件)をはじめ、少数ながらもDV被害、虐待被害、虐待被害の存在が確認された。通話料金は相談者負担のため詳細の聞き取りが制約される状況でも、他の深刻な問題の存在

が把握でき、今後、関連問題への関与をどのように展開するかは大きな課題である(図7)。

9) 精神医療利用状況と利用理由

精神医療の利用状況では、17%の方が精神医療のユーザーであった(図8)。精神医療の利用理由別では、依存問題として医療を利用しているのは3%にすぎず、他の14%の方は依存問題以外の精神医学的問題で通院または治療を受けていた。相談者は、すでに精神医療を利用しているが依存問題について主治医に相談できない・していない、相談しても聞いてもらえないなど、依存問題として医療を利用している方はごくわずかであった。

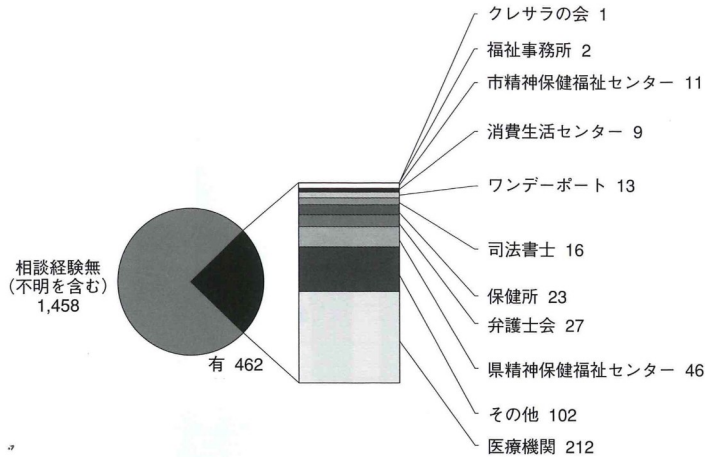


図6 相談経験と相談先

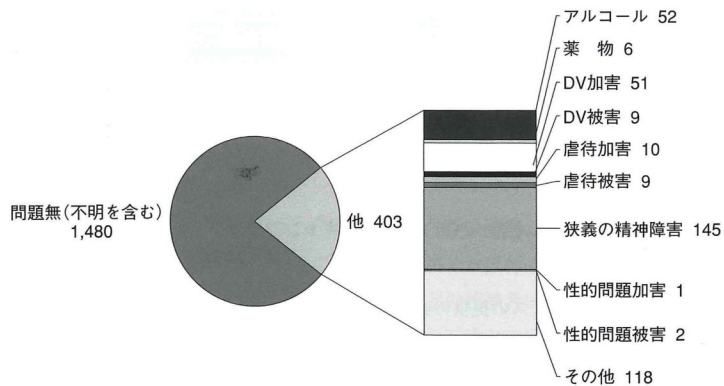


図7 相談者の有する関連問題

見方を変えると、パチンコ依存問題は、医療に乗りにくい問題であるとも言えよう。精神障がい者の社会復帰が促進される中で、社会の中で居場所がうまく見つからない人たちの受け皿としてパチンコホールが機能しており、その利用者の一部にパチンコへののめりこみの問題が重複しているようである。パチンコホールも医療関係者も、ともに注意深いリスクマネジメントが必要と思わ

れる。

10) 紹介先

相談を受けた電話の21%は、話だけ聞いて終了し、71%のケースでは他の相談機関を紹介した。可能なかぎり、相談者のニーズにあった利用できる社会資源を探すように努力をしているが、相談者のニーズがはっきりしなかったり、ニーズ

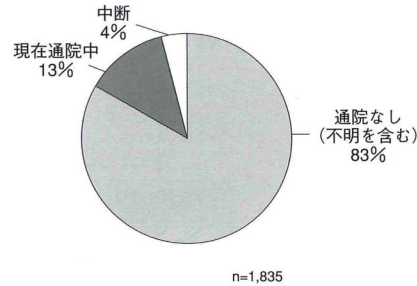


図8 精神医療の利用状況

に合う相談機関が相談者の居住地域にはなかったりと十分な対応ができないまま終了してしまうこともあり、相談対応のレベルの向上など相談員の取り組みと、全国的な問題啓発が必要と感じている。紹介先としては、精神保健の問題として、地域のサポートを受けていただくために、精神保健福祉センターの情報を積極的に紹介している。

また、本人、家族の方に、当事者相互援助グループ(ギャンブラーズ・アノニマス、ギヤマン)の情報を提供し、精神科医療機関を利用している方は、主治医に戻すことを原則としている。医療機関については、医療機関によって対応レベルの差が大きいため紹介は行っていない。医療機関や精神保健福祉センターから電話番号を聞いたと相談されてくる方の対応には、苦慮している。

問題領域は、全体から見ればごく一部に過ぎず、わたしたちのデータが何をどこまで捕らえているのかも現時点ではわかっていない。また、個々の相談ケースへの対応から、否認の打破や底つきを回復への重要な要因に据えてきた従来のアディクション・モデルを核にしてきた介入方法では、対応が困難であると考えている。これは、病的ギャンプリングそのものを医学的にどのように位置づけるかという根本的な問題と関係しているであろう。

パチンコ依存問題は、医療、司法、福祉、行政機関、遊技事業者、ユーザー、世論などパチンコとの関係のあり方、個々の立場などによってその概念から対応まで、実にさまざまであり、同じ基盤のうえで議論することさえなされていない。RSNの活動を通して問題の本質を浮かび上がらせることによって、異なる立場、異なる見解を超えて、問題の防止や解決のあり方を論じる土俵の役割を果たせないと考えている。問題を抱える当事者の声こそが回復支援に真に役立つ生きた情報であり、その情報を日々蓄積し、当事者の回復支援はもとより社会に還元したいと考えている。その一環として、現在、電話相談事業に加え、関係者(援助職者、司法・債務問題関係者、パチンコ関連業界など)を対象としたギャンプリング問題の研修講座を2008年より企画・開催している。

(参考文献)

- 1) 2006・2007年度 リカバリーサポート・ネットワーク ばちんこ依存問題電話相談事業報告書。リカバリーサポート・ネットワーク、2008。

おわりに

パチンコに関連する問題は、その存在は広く知られているにもかかわらず、アルコールや薬物の問題に比べ、ほとんど実態もその本質もわからな

●リカバリーサポート・ネットワーク
相談電話(専用回線)
050-3541-6420
月～金(祝祭日除く) 10:00～16:00